

香 華

昭和三十七年十二月十一日印刷
昭和三十七年十二月十五日發行

校印磨正

著 者 有 吉 佐 和 子

挿 画 生 沢 朗

装 幀 者 町 春 草

発 行 者 宮 本 信 太 郎

印 刷 者 山 田 博

発 行 所 中 央 公 論 社

東京都中央区京橋二ノ一

電話 五九二一―九

振替東京三四

定価 四八〇円 ©

香
華

第一章

朋子^{ともこ}は、小さな手の小さな指を力一杯にひろげて、叮嚀に幾度も絹の小裂^{こさけ}をなで展^{ひら}げていた。ひろげても庭先の楓の若葉に足りない小さな掌であつた。温暖な紀州の田舎家は、どの家も縁側がかなり幅広い。四尺余の広い縁の日溜りに大きな座布団を敷いて、ちよこんと坐つた朋子は、幾枚もの絹裂を飽かず^{あき}に掌で慈しんでは、やがて二枚重ねて針をとつた。針は子供用に祖母が与えた針孔^{はりあな}の大きな木綿針で、赤い絹糸は難なく通り、朋子の手は長さを頃合に計ると小さな缺で音たてて糸を切つた。

縫う手つきだけは大人びていた。まず針先を切り下げの頭にひよいとつけて、見よう見まねの油をつける。それから裂の片端を左手でつまみ、右端を針先あててきまると、ぐっと上半身をのばして運針の姿勢になつた。年より一層小柄なのに、どこかがかっきりときま^{きま}ま^まていて、まるい輪廓とまるい眼とぼってりした下唇という童女の顔を戸惑いさせた。子供に似けない厳しさのある姿なのだった。

しかし絹に木綿針では作法にかなわなかつた。髪油をなすつたにもかかわらず、針はぶつぶつと不粋な音をたてて、絹の端に大きな穴をあけた。赤い絹糸は、身にあわぬ大きな穴をくぐって心細そうに曳かれてはするすると走つた。表は厚ぼったい

縮緬で、裏は平織りの銘仙という無理な布の合わせ方も原因して、縫い上がったところは、朋子の桜色の爪先がほてるほどしごいても、どうにも不細工な出来上がりになつた。しかし朋子は丹念に糸をしごき、座布団の左側に重ねてある縫い上がりの布の上にそれを重ねた。

その布も、一尺一寸幅の反物の端片であつた。それを朋子は同じ縦の寸法で合わせて小さな矩形を幾つも作つていた。二枚ずつ縫い合わせると、全部で四枚の袋が仕上がった。二枚はやや幅せまく、後の二枚は少しばかり大ぶりである。

「まあま、静かに一人で遊んでいると思うたら、裁縫かいし。なに縫うて、朋ちゃん」

祖母の声で、朋子はまるい眼をあげると、それまで一心に突き出していた下唇を柔らげて口を開いた。

「おふとん」

「まあ布団を。人形^{にんぎょう}さんのかいし」

「ふん。おばあちゃん、綿ほしいねんわ」

「はあて、綿は納戸^{のりど}やがの。明日など出してあげまひよう」

「納戸の綿やのうてもええわ。おばあちゃん、富貴綿^{ふききん}でよろしいわ」

「ええ、富貴綿でよろしいのんか」

「ふん」

祖母は驚いて、内心この孫娘のつましさを彼女の母親である郁代に逆に学ばしてやりたいと思つた。富貴綿というのは、着物の裾に細く入れる綿のことで、解きものをした後で祖母がそれを丹念に針箱の底に溜めていたのを朋子は知っていたのだ。四十過ぎたばかりの祖母は、孫があるとは思われぬ若さがあ

って、小肥りの色白な肌がまるで女盛りに見えることがあった。彼女と朋子の母親と朋子という女ばかりの須永の家を、村の人は年のはなれた姉妹の住居だなどと噂しあっていた。だから須永の家から婚礼があるという噂がきかれたときには、三人いっぺんに嫁に行くのかと冗談が出たほどである。

祖母のつなは一昨年から後家になっていた。その一人娘である郁代は隣村梅原の名家である田沢の一人息子と想いあって、どちらも一人子であるところから養子も嫁入りも工合が悪く、親同士で揉みぬいて結局は郁代の父親の頑固さと田沢の息子の郁代への執心から、条件は生まれた最初の子供に須永家を継がせるということになった。だから戸籍面で郁代は田沢郁代だけれども、朋子は生まれ落ちるとすぐに須永の籍に入った。しかし親子三人は須永の家で暮らしていた。郁代が田沢の舅姑と一緒に暮すのを好まなかったからである。

明治の末に、相手の親と暮しながら嫁などというのは、あっても通るものではなかったのに、戸籍のややこしさが手伝って、ともかく世間とは違った夫婦生活、妻の我儘が優先するような生活が始まったのだが、それも束の間で、朋子が最初の七五三を迎えるころ、父親は急性肺炎で呆気なく逝ってしまった。郁代は二十歳の若さから、すでに三年後家を続けていた。

そこへ、今年六つになる朋子が、どこか年に似合わぬしっかりものの面影をただよわせているので、村人たちは三人のうち誰が嫁に行っても可笑しくないと冗談を云ったのであった。しかし三人のうちの誰かということは誰にでも分っていた。つなはの筈がなく、朋子の筈でなければ二十三歳になる郁代以外に嫁に行く者はない。しかし田沢の息子を強引に自分の生家に住

まわせた郁代が、今度は自分から家を出て行くらしい様子なので、本来はそれが当たり前なのに世間では却ってそれを驚いていた。

「吾が家にいて何が不自由でもないのに、子を置いて嫁に行く女が他にあるやろか。それも色恋で狂うたわけでもなしに」

つなは愚痴ばかりこぼしていた。配偶者を亡くして寂しいところへ、それまで一緒に暮らしていた娘が嫁に行くのは、それが一度は角隠しに振袖を着せた娘であるだけに母親には仲々納得がいかなかったのであった。

「朋子のことで迷惑でしたら連れて行きます。先方はそれでもええと云うてですから。それでも朋子は須永の家の者やと云うから、ほな置いて出ましようと云うただけです。間違わんといて下さい」

「そやかてあんた、死んだ成吉っつぁんに済まんとは思えへんのか」

「成吉っつぁんには云うたります。なんで先に死んだんやと云うたります。私を残して行ったから悪いんやわ」

「なにも子〇沢山の家に行て、今から苦勞することはないと思ふんやけどの」

「苦勞はささんというて、約束ですねん」

「いくら約束いうたかて、相手が相手や、嫁に行ったら舅姑の苦勞は避けられますものか。成吉っつぁんと、この家で住んだのと同じにいきますものか」

「お母さん」

郁代は、屹と顔をあげて、それまで針を運んでいた手をとめて云った。

「それ、焼餅^{やきもち}とちやいますか」

後家が、もう一人の後家の嫁入りに難癖をつけるのは嫉妬ではないかと、娘は母親を非難したのだ。郁代の大きく切れた眼尻に「瞬紅が走った。つなは息を呑み、そして言葉を閉じた。

それは、つなも娘を憎んだ瞬間であった。一度でも親らしい扱いを郁代にされたことがあったろうか。身勝手、ただ着るものばかりを強請る娘だった。裁縫だけは須永の家の女系にたがわず、針は立ったが、ともかく自分のものばかりを娘の頃から縫いつづけ、成吉の死んだあとも呉服屋の届けるものには眼を光らせて選り好み、当世風でも村では奇抜な着物姿で人々の眼を瞞らせていた。庄屋の息子の眼に止まったのもそれ故に違いなかった。つなは、憎々しく郁代の膝の上に彩り群れている縫いかけの長襦袢を睨んで、いつまでも黙りこくって坐っていた。最初の華燭には、つなからいそいそと針を運んだ娘の嫁入り支度であったが、この二度目の郁代の婚礼衣裳については、つなは頑なに手伝うまいとしていたのだ。

祖母と母親とのこの確執を知らずに、朋子は暮れがての庭に向って、又も一心不乱に人形の布団づくりに精出していた。古い富貴綿を指先でほぐしては、ちょうど春の空に浮ぶ雲のように薄く薄くひきのぼし、それを幾帳も例の裂の上に重ねては表を返して形をつける。針先で四隅を突いて角を描える技術も、彼女はいつの間にか学んでいた。四寸幅八寸の敷布団二かさねと、七寸幅八寸の掛布団が二かさね、つまり人形の絹夜具一組が出来上がったのは、彼女が仕事にかかって三日目の日暮れ方であった。母親の嫁入りは耳にきいて知っていたが、それが自分とどういう関りがあるのか、六つの子供の智慧では計りかね

ていた。朋子が母親の嫁入りで喜んだのは、かなり派手な小裂が前より惜し気もなく与えられたからである。おかげで人形の為に前から欲しいと思っていた上等の夜具が揃った。

枕は明日縫うときめて、咄嗟に小豆入りのお手玉を敷布団の端に置き、優しく人形の頭の下に置いた。お河童の市松人形は、朋子と同じ着物を着ていた。それは朋子が祖母に強請って縫ってもらったものである。うすく卵色があった地に紫で大きく矢絰を織り出した銘仙で、朋子の着ている方は母親が選り母親が縫ってくれた数少い着物の中の一枚である。銘仙にしては夕陽を受けた肩や袖の光り工合が派手だから、何れは御当世の新しい織物か、郁子の凝り性から探し出したものだったかもしれない。女の記憶は例外なく着ていたものに浸みこむもので、朋子もこの日のことは、この大ぶりの紫矢絰と共にすっかり浸みついたように覚えている。後に大人になってから母親の昔を回想するとき、朋子は必ず幼い日の自分に人形と同じようにこの着物を着せたものであった。この日の母親が、朋子の記憶の最初の頁にある母の像であったからだ。

鶴が羽をひろげて子をかばうように、朋子は紫矢絰の袖を縁に這わせて、布団に寝かせた人形の上から顔をのぞきこみ、掛布団の裾を軽く叩いて子守唄を唄い始めた。

ねんねしなされ、

ねんねこなされ。

なくこの、かかさま、

くもがくれ。

ねるこの、かかさまは、

ここに、ござる。

決して並はずれて好い声ではなかったが、節まわしが六つの子供にしてはしっかりしていた。大きな声ではないのに、ひとつひとつの言葉がはっきりときこえる。くもがくれという詞は、くも、が、れ、と切るもので、これは普通にきくと意味が分らないのに、朋子は声量があるのか一息に唄うので雲隠れという意味がよく分った。たまたま来合わせた新家の大叔父が、ほろりと云って感心した。

「朋ちゃんよ、雲隠れちゃう意味は、なんのことか知っとるかい」

「ふん」

人形遊びを妨げられたので朋子は不機嫌な返事だったが、それでも顔をあげて大叔父に背いてみせた。

「どないな意味ないな」

「見えんようになることやわ」

「惻然なよ、のう、おつなさん」

大叔父は声をきいて出てきた朋子の祖母に話しかけ、わざわざ今の会話を反芻してきかせた。夫の生前から、彼とはあまり折合のよくなかったつなは、露骨に嫌な顔をして聞いても聞かぬふりをしたが、年寄りの彼は遙かに年若な嫂の態度など歯牙にもかけずに一人で感心し続けた。

「泣く子の母さま雲隠れ、じゃと。無心に見せても子供は知ってじゃ。賢いだけに哀れやとは思いなさらんか、ええ、おつなさんよ」

「なんのことでございますし」

「朋子の母親のことですがな」

「郁代の嫁入りでございますか。まあ先日^{きんど}はなんや御丁寧な御挨拶を頂きまして大きに」

まるで当てつけのように大仰な婚礼祝いが届いていたが、この須永の自家ではまだ答礼がしていないのであった。つながまるで気乗りしていないので、そうした諸事は万事不行届なのだ。それをこうるさく突つきに來られたのかと、つなは郁代までが恨めしくなってきた。口先ばかり恐縮して頭を下げたのだが、義弟は瘦せて尖った顔の表情も変えずに片手をふって、彼女の言葉を退けてしまった。用件は別にあった。

「田沢の家からな、儂のそこにお人が見えましてえ」

「法事のお話でしょうかの」

つなは怪訝な顔であった。田沢というのは郁代の亡夫の家である。親類づきあいはいしていたかもしれないが、本家への話を取り次ぐほど新家と親しくしていたとは知らなかった。何にしても、のっけから愉快な話ではなかった。そしてつなの予感はずぐに的中した。

田沢家では一人息子に死なれて後つきに困っているという話なのであった。田沢成吉は三年前に死んだのだから、その話はそのときすぐ出ても決して可笑しいことではなかったのに、田沢の当主がつなの夫より遙かに若かったのと、妾腹に子供があるという噂もあって、そのままになっていた。郁代の再婚で話が出たということなのかもしれない。

「一人息子の一人娘やということな、朋子を返してもらいたいという話でな、儂が使者というわけですわ」

「今になって急に、そんな勝手な。朋子に須永を継がせるいう

のは、朋子が生れん前からの約定でっせ、うちのお父さんが、それ条件にして郁代を嫁に出しましてんがな」

「そこが昔と今とは、話が違ってくるというわけです。田沢はんとも、成吉があないに若死にすると思わなんだと云うし」

「お互いさまですわ。うちかて成吉さんがあない早う亡くならなんだら、郁代も二度嫁入りせいでますんでましたわいな」

つなはうっかり相手を忘れて愚痴をこぼした。当の郁代相手にはかなり辛辣に再婚の嫌味を云っても、他人には喜んで出してやったという顔をしていたい。が、この心理は、これで見破られた。義弟は敵だらけの顔をにやりと笑い崩して、

「ほんまになあ、娘の頃から何かと派手な郁代さんのことやで、一層ふうが悪いわなあ」

と、露骨な毒を吹いた。

「朋ちゃん」

つなは取乱しかけて、孫娘の名を呼んだ。

「寒うなるといかん、部屋に入りなさい。さあ、人形さんも片として、え。ええ子、ええ子」

郁代の悪口は朋子の耳に入れたくなかった。それに新家の用事というのは、朋子本人に関することなのであった。頑是ないといっても、かなり早熟な子供の耳には聴かせたくないことばかりだった。

祖母にせきたてられて、朋子は口答え一つせず聞きわけよく座を外した。坐っていた座布団の上に人形と人形の布団をのせ、両手一杯に抱え上げると、よちよちと歩き出した。態度に大人びた早熟なところがあるのに、まるい顔と足の短さには年

よりもっと稚げなところのある子供であった。大きな持物で目の前も見えなくなつて、覚束ない足どりで、朋子はおそろのおそる仏間の隣にある祖母の居間まで廊下伝いに歩いて行った。祖母の部屋はまた朋子の部屋なのでもあった。もうずっと前々から、朋子は母親の手許を離れて祖母と共に起き伏ししていた。

廊下から暗い仏間を通して右手の襖に手をかけようとしたとき、朋子は異様なものが部屋の中にたちこめている気配に気づいた。間に眼をならそうとして向こうを見ると襖ごしの母親の部屋から、何か細い白い隙間風が吹いてくるように見える。手の荷物を下に降ろすと、朋子はそっと近寄っていった。

襖に隙を作ると、まだ暮れきっていない表の明りが郁代の部屋には一杯にあふれているように見えた。実際には障子も襖もたてきっていたので、六畳の部屋は早くから昏れていたのだが、朋子のいる仏間の暗さがそう見せたのだらう。向こうを向いて坐っている若い母親の左肩が見えた。よほど冷えこむ夜でない限り羽織は着ない郁代だったから、痩せぎすの肩には体の線がそのまま出ている。肌着も薄いのであった。普段着にも絹物を離さない郁代は、この日は朽葉色の錦紗を着ていた。当主のいない家で、女中の手も決して多くない小地主の須永家で、郁代はまるで嫁き遅れた都会の令嬢のような掛け離れた雰囲気の中で暮らしていた。

朋子の眼は母の肩から左へ移り、そしてあっと眼を瞠った。炬燵から煙が出ている。白い煙が燗すように湯気のように華やかな炬燵布団を捲って立ち昇っている。

「まあ、朋ちゃん。どないしたんえ」

襖を開けて飛び込んだ朋子に、郁代は驚いて云った。

「おかあさん、煙が……」

「はあ、これですかいし」

若い母親は、うっすらと笑って、それから急に眉をひそめると朋子に開けた襖をしめさせた。

「煙は煙でも、これはお香と云うもんです。匂いを焚き込めてるんやして」

炬燵と思ったのは、香籠の上にかけた郁代の着物の数々なのであった。縮子や縮緬の色艶の違った幾枚もの着物が、縋糸をかけたままでさばき展げられ、籠の上に重ねられていた。

「これ見ておみ」

郁代は得意げに、その着物の裾々をかきわけて、篠竹を裂いて編んだ伏籠の中を朋子に覗かせた。朋子は薄気味悪く、母親の掻き分けた着物の裾がまるで魚の肌のように動くのを氣使いながら、そっと暗い籠の中を見ると、顔を近寄せる前に籠の中から白い煙がもわりと出て朋子の顔を包みにきた。

「う……」

鼻孔を刺した芳香にむせたまま、朋子は訴えるような顔で母親を見上げたが、

「ええ匂いですやろ」

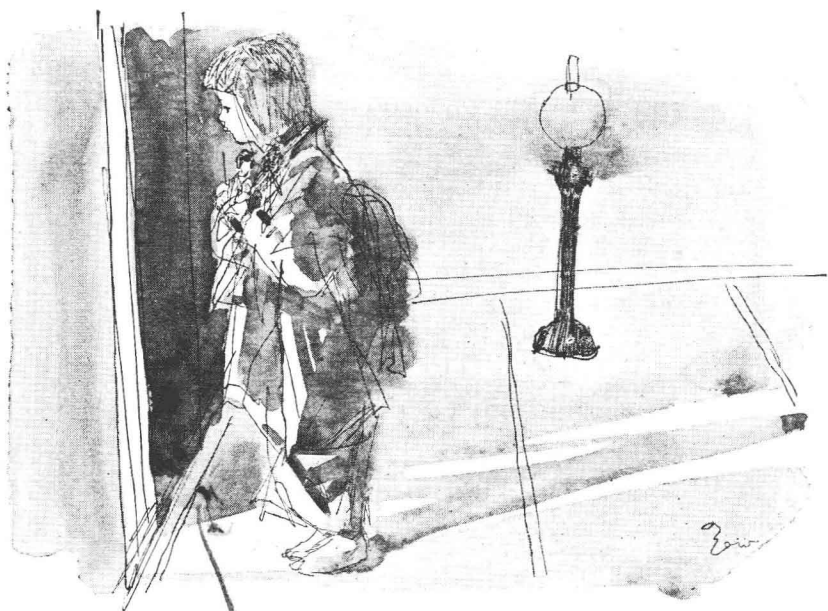
郁代は得意げに、裾々を支えていた白い手を膝に戻した。縮子も縮緬も、するすると生物のように動いて元に戻り籠を捲った。馥郁とした香氣が、ようやく辺りに漂い始めた。朋子の鼻粘膜が、その強い匂に馴れたのかもしれない。が、朋子は放心を續けていた。

白い煙が霞み立つ遙か向こうに、美しい母親の顔があった。細面に鼻筋が通り、眼はすすやかに長く切れ、まつ毛の色が濃

い。薄い唇は、へらで型をつけたように形よく、頤のかすかに短い欠点を押えている。何より際立っているのは、濃くて多い黒髪であった。夫のある頃からの丸髻が、いつからか結締に変わっていて、ほつれ毛もなく艶々しく結いあげられてあった。てがらの鹿の子は着物に合わせたのか濃い卵色で、この煙立つ向うでは黄金色に見えたりする。翡翠の根締めがぼつんと一色だけ新緑のように変った色をのぞかせている。何もかも吃驚するほど朋子には美しく見えた。自分の母親がこんなに美しい人だったのかと、幼な心に愕然とするほどであった。

「おかしな子……」

郁代の方は、まじまじと自分を見詰めている吾が子に、こうした眩きを与えただけで、相変らず衣裳調べに余念がなかった。針自慢の彼女は、つなが手伝わらないのに当てつける気で、何一つ他人の手は借りずに支度を整えていたのであった。へらも針も確かなら、その速さにも自信があった。台所も掃除も洗濯も何一つしないのに、針を持つことだけは頼まれなくても厭わず、飽くこともなく、郁代は娘の頃も妻となっても、母となっても後家になってからも、自分を粧う為に縫い続けてきた。それも習った通りの方式に適った裁ち方縫い方に長じているだけでなく、かなりの独創性を持っていた。袴芯の厚いのは嫌って木綿布を入れずに絹物の衿をピンと仕立てる方法も發明していた。胸が短くて、手足の長い体つきに適うように、袴も身丈も衿下の寸法も定められたものとは桁外れに違っていた。袴幅も違えば着付けのコツも郁代自身のものがあって、仮に同じ柄の着物に同じ帯を締めて娘たちの中に入っても、その美貌ばかりでなく垢ぬけた姿で人目には立つ筈であった。だから、並と違う色



柄を選んで着て歩けば、いくら温暖な土地で人々の気風がのんびりしていても、噂にのぼらないわけにはいかなかった。

その上、暮しが全般的に豊かな国として、人々の気風は大きく保守的だった。若後家が派手に粧うことは感心されなかったし、髪型一つ変えてもそれは当分の間、村中の話題になる。海草郡西ノ庄村には赤貧の水呑み百姓がいまいわりに、小地主の数が村にびっしりと多いので、彼らの敵わぬ大地主の娘ならばともかく須永の一人娘では蔭口もまた大っぴらにきかれた。そこへもってきて、彼らの敵わぬ大地主の息子が郁代に懸想したのである。村中は蜂の巣を突ついたらような騒ぎになっているのである。村で荷を背負った呉服屋が来るのは、昔は庄屋の家だけであって他の者は皆町へ出て安い反物を買うならわしだったのに、須永の郁代は前の婚礼前から呉服屋を家と呼びつる習慣を持った。以来、呉服屋は季節の変わり目どころか月に一度でも二度でも、この村には足を運ぶようになっていて、遠い道を来るのだから来れば一日がかりどころか、二日、三日の逗留で、呉服屋の番頭はよく庄屋の家に泊った。彼の口から庄屋の息子にかねての郁代への執心を募らせたのだということであった。これも村人たちには面白くない話なのだ。しかるべき人の口から出た縁談ならばともかく、小商人の口から他ならぬ庄屋の息子の後妻がきまったというのでは誰も祝う気になれないのである。しかも、庄屋の息子は、郁代が娘の頃にすでに目をつけていて、成吉が死んだときいたとき、家の女房が死んでくれればいいと洩らしたことがあるのだから、人々は一層死んだ庄屋の嫁に同情した。三人の子を残して妻が死ぬとすぐに、高坂の敬助は郁代に結婚を申込んだのである。婚礼の日取りはま

だ先妻の一周忌が来ぬうちであった。

当然、敬助は非難されるべきだったのに、村人は不思議なことに敬助よりも郁代の方を憎んでいた。かねて目障りな女だったからかもしれない。

「どないな面さらして嫁御寮になりよるか、みたれ」

「まあ、も一度島田に結う気かいな」

「結わいでか、呉服屋は白無垢やぬかしよった」

「白無垢をてか、まあ、ほな三度目の白無垢やないの」

女たちは顔を見合せて嗤いあった。東京では既に西洋式の花嫁衣裳が現れていて、遙か関西の田舎村にも新聞紙や婦人雜誌の口絵などでそれが紹介されていた。その影響もあったのか、もともと前からあるにはあった白無垢の婚礼衣裳がかなり頻繁に用いられるようになった。しかし郁代の七年前の嫁入りは、この村始まって以来初めての白無垢の着付だった。もちろん色直しもかなり派手なものだったのだが、かねて評判の美貌が白すくめに粧ったときは、その頃は今ほど彼女に悪感情を持っていなかった彼らを純粹に驚嘆させた。だから女たちは昨日のことのようによく覚えていた。

もう一つ彼女たちが覚えていたのは、田沢成吉の葬式の喪主であった郁代だった。黒い喪服の老若男女の中で、白い喪服を着た郁代は若いだけに一層際だって目にしみるように美しく見えた。悲嘆に暮れている不幸な者に對しては人々は必要以上に寛大だったし、二夫に見えないという決意の白い喪服は人々を感動に誘った。娘の頃から何かと話題に上った郁代を人々は一瞬にして忘れさり、当座しばらくは村一番の貞女のように褒めそやしたものである。夫の死に一滴の涙もこぼさなかった郁代

を覚えていたのは、つなばかりだったが、そのつなでさえも娘の白衣の前では目頭を押えて、死んだ成吉を悼む者と思い、あらためて娘の不幸を悼んだものであった。この印象が強すぎた為にか、母親の彼女すらも、郁代が空閑を守るには若すぎるということ忘れていた。その若さは悲劇のためになければならぬものでしかなかったのだ。

嫁しては夫に従う妻の恭順を象徴する婚礼の白無垢と、二夫に見えない決意の白い喪服とを二つとも着てしまった郁代には、あとはただ残された小さい者を頼りに生きる母としての生涯しか残されないものと人々は思いきめていた。仏教の信仰の強い土地であったから、そんな若御家は何も珍しいことではなかったし、夫の死後里方へ戻されたのでなく、始めから親の家にいた郁代だということを人々は迂闊にも忘れていた。それらは無理ではなかった。郁代の親たちでさえもそれを忘れていたからである。子がなければともかく、須永の次の代は一つ飛んで朋子の養子に承継されるのだから問題はなかった。かすかに田沢家の出方を心配したが、その点での音沙汰はない。だから、須永の家では養子が死んだだけのことという考えに納っていた。前と同じく一人娘との安穩な生活が戻ってきただけだ。老いた当主の為に、可愛い孫娘が生まれている。もう問題はないのだと思っていた。

だから、つなは夫が死んで自分も寡婦になったとき、近い日に郁代も家を出て行くことになるとは夢にも考えなかった。若い郁代の齢を云って、気の毒だとか可哀そうだとか云う者があっても、ありきたりの挨拶だと思って意に止めなかったし、自分が娘と同じ境遇になったというのでは、奇妙な安堵さえ覚

えたのであった。つなは夫の葬式に、白い喪服を着なかった。娘の真似をするのは恥ずかしいし、また出来る年齢ではなかった。二十以上も齢の違う夫の死には何か解放感があって、そのとき初めて成吉の死に泣かなかった郁代の心を知ったと思った。大げさに云えば、つなは自分たちに晴れて自由が来たように、思わぬまでも感じていたのに違ひなかった。女ばかりの家が、この上なく豊かな空気に、ふわりと浮び上がって、これから自由に雲の中を漕ぎまわることができるのだと、そんな不逞な空想さえも、つなは夫の死後幾度かしていたのだ。郁代が成吉の歿後、縫物さえさせておけば幸せて何一つ不満も愚痴もこぼさなかった謎が解けたようにも思っていた。

郁代が、そういう想いでいるつなを置いて、家を出て行くということがきまったとき、つなはだから仰天したのだった。誰一人目に立つ者が、それらしい使い人が家に入りましたわけではなく、このときは呉服屋の膳ごしらえとは気がつかなかったから、急に青空が割れたようにつなは驚いてしばらくは口がきけなかった。郁代の方ではごく当たり前のことを話すような口調で、庄屋の跡とりが自分と再婚するのだと事務的に報告したのだ。そして親の許しもとらず、手筈を次々と運んでいた。呉服屋は、文句を云う気で待構えていたつなに、にこにこ手を揉んで挨拶した。

「へえ、この度は、おめでとうさんでございます」

呉服屋の口から、その日のうちに村中に噂は知れわたり、つなは表に出ると村人たちの祝い言葉にうろたえて、それを否定することもできなかった。相手が庄屋の息子では、母親の反対がどんな悪い結果をもたらすか知れないと、おびえたのだった。

庄屋と云っても、高坂敬助の家は代々庄屋をした名家ではあった。町村令が出てからはその世襲制度が揺いでいた。当代の主人は、村長ではない。ただ村一番の大地主というだけだが、現在の村長は彼の顔色をうかがわねば何一つ決裁できないということになっていた。しかし次の敬助の代になったら、どういうことになるか分ったものではないと人々は噂していた。一口に庄屋さんと呼ばれている敬助の父親に対する遠慮で、誰も敬助を悪く云うものはなかったけれども、敬助が東京の大学へ行ったことがあるというのに誰も彼を尊敬しようとしなかった。敬助の方でも心得ているのか、あまり目に立ったところには姿を現わさなかった。親にあてがわれた嫁の傍で、ぼんやり煙草を吸ったり、雑誌の類を読んだりという生活で、表向きは役場の書記という仕事は持っているのに、役場に彼の姿が見られたためしはなかった。

敬助の履歴というものに敬意でないまでも注目したのは、どうやら郁代だけだったようである。つなが郁代に何故その気になったかと問い詰めたときに、

「やかて、敬助さんは東京を知ってなさるがな」

と、はつきり云ってのけた。郁代の敬助に関する知識は、あるいはそれだけなのかもしれないが、それが全部であっても、つまりそれ以外何一つ取柄がなくても郁代は嫁して悔いなしと思っていられるらしい様子である。いや、しかしそれでは郁代を誤解していることになるかもしれない。この言葉は、つなが無理強いて郁代に云わせたものと云って云えないことはない。その証拠には、郁代がやはりつなにこうも云っているからである。

「こないして一人で家にいる私を、嫁にと云いなしたんは敬助さんだけやして。これ外して、他の話があるやないや分らへんし」

着たい着物さえ縫わしておけば不満はない娘だと思っていたつなが、そもそも誤解していたのであった。鳥は青空を飛ぶ翼を持ったまま枝に長く止まっていることができるのを、つなは迂闊だった。鳥はいつか飛ぶ。

幼い朋子が、母の嫁入りで覚えているのは、あの香煙の彼方にいた美しい母の貌の他に、折にふれて悲嘆に暮れていた祖母があった。村人にも新家の者にも云えぬ嘆きを、つなは孫の朋子にだけ抑制せずに展げさらした。朋子を見るたびに、朋子が不憫だと云って、ぼろぼろと涙を流すのであったが、それは真実孫を哀れんでいるからではなくて、つな自身の悲しみや郁代への恨みを屈折させたものだということが、幼い朋子にもよく分っていた。

物持ちのいいつなは、灰色に変色して糸腰のぬけている古手拭を、いつも内懐にしていたが、泣いては涙をそれで拭い、愚痴をこぼしてはそれで涙をかんんでいた。華燭に女親の流す涙とは較べものにならぬほど激しく、それは殆ど淫らなほどであった。

「朋ちゃん、あなたのお母さんは、な」つなは睨りあげながら朋子の髪に片手を置いて、それを強く押して云うのだ。「この年寄ったお母さんを置いて、この家を出て行くんですえ」

頭の先から、ずっしり重い怨念が朋子の小さな肉体に沈んできた。つなが自分で云うほど年寄りでないだけに、つなの言葉には奇妙な哀れさが響いていた。朋子を哀れと云いながら、や

はり本心は自分が残されることへの悲しみであったのが、この言葉で明らかにされていた。祖母は年ほもゆかない孫娘に自分の悲しみをぶつけにぶつけているのであった。朋子は祖母の顔が涙で皺み、くしゃくしゃになって、彼女の言葉通り老いてみえるのを、驚いて眺めていた。娘の嫁入りがこんなにも親に衝撃を与えるものなのかと、朋子はすでに早く観察を始めていたらしい。朋子の親である郁代の嫁入りには深く想うことがなかったのに、朋子は泣き嘆くつなを見て、親とはこういうものかと幼な心に会得していたのだった。六歳の朋子に、こんな会得をさせたというのは、朋子の聡明さを示すよりも、つなが取り亂し、郁代も親の資格を失っていたという環境というものだったかもしれない。

「朋ちゃん、こんだ新家のおいやんが、あなたを狙うてんのやで、あなたをな、この年寄ったおばあさんから引き離そうと思うとんのやで。郁代はそれを知っても、家を出て嫁くんやして。朋ちゃんのお父さんはな、この家で暮したのにな、郁代は親不孝で、親のいうことききさらさんと、こんどは家を出ますのじゃ。だなさん亡くなったんで、私を女親と思い阿呆にしてさらすのじゃ。吾だけが幸せになる気やして。親不孝な」

恨みと憎しみをこめて云う親不孝という言葉は朋子の耳の奥に刻みつけられて、終生消えることがないように思われた。子供心に、こうした言葉を吐かれる親不孝ということは、なんとという怖ろしいものだろうと思っていた。祖母をなぐさめるという格好な気持からでなく、祖母の言葉を遮るつもりで、朋子は口を挟んだ。

「おばあちゃん泣きいな。朋子が居ますのんに」

「お朋ちゃんの云うことわいの」

つなは一層声をあげて泣き、ひとしきり泣いてようやく気を晴らしたらしい。婚礼の席に郁代の里方として連なるときの朋子の晴着についての心配を俄かにし始めた。

「郁代が晴れをする席で、あんたも晴れをしながらがええ。親に当てつけて紅白粉はいてあげまひよ。まあ目鼻だけは、あんた、死んだお父さんにそっくりなや」

つなは当日、花嫁の郁代をかまう筈の手間で、朋子一人にかかりきった。七五三より一年早く、朋子は祖母の手で厚く白粉をはかれ、唇に紅を塗られたのであった。まるい眼が濃化粧されて一層大きくつばらに輝き出し、人々は朋子を見ると大仰に感嘆した。

「まあ、まあ、可愛らし。人形さんのようなや」

「ええ着物着せてもうて、まあ美しこと。誰が着せてくれたんよし、え、おばあさんが、そうかいし、そうかいし」

朋子を褒めそやすのは、花嫁への当てつけなのであった。成吉に似ていると小声で囁きあって目顔で背いている者たちもいた。つなが町の大きな帯屋で探してきた派手な着物は、朝色に梅の花が飛び散っていた。帯を胸高に締められたので、朋子は一層姿勢よく両手を膝の上に置いたまま足も崩さなかった。人は寄ってくると朋子の袖や袂にさわって着物を褒めたが、それもまた郁代に対する当てつけにきまっていた。

噂にのぼっていた郁代の白無垢姿をごく身近に見たものは庄屋の高坂一家と須永のごく親しい親戚だけであった。まだ昼日中であるのに庄屋の家の仏間は縁から遠くて日が射し込まぬ陰湿な一室だった。その薄暗い中で綿子一式で身を粧った郁代は、

まるで高貴な女御が突然賤家に現れたような場違いの雰囲気を持っていた。何より人々を狼狽えさせたのは、花嫁の顔が何物にも掩われずに文字通り白昼堂々と彼らの前に現れたことであつた。

つなの隣にいた新家が大きな声できいた。

「綿帽子はどないしたんよし」

つなは駄中を火のようにして答えた。

「私は何も知らなんだんやしてよし」

「娘の婚礼にかいし。まあこの年まで綿帽子冠らん嫁さんは見たことがなかったよし」

説経は始まっていた。この日の新郎新婦は二度目で場馴れしているのか静かに仏前で合掌していた。郁代の耳に人々の動揺と新家の叔父の声高な声が入った筈であつたのに、彼女の凜とした後姿はそれらを完全に黙殺していた。東京では、もう綿帽子など誰も冠らないのだ。敬助は分っていると、小さな信頼ではあったが、郁代は始めて夫となる人に心を寄せていた。

披露宴に出ても、この一件はすぐ問題になった。

「綿帽子も冠らん嫁さんやないけ」

と、人々はざわめき出した。

「そら、あんた、二度目やもんよ」

「白無垢着てもかいし」

「どだい、この婚礼に白無垢着るのが可笑しねん」

庄屋でも敬助は再婚だったから、この婚礼は万事が略式だった。男ばかりの前座、女ばかりの後座と、客を二度に分ける慣習に従わず、男女混せて招いた上、町から呼んだ芸者の数も少く、親戚と村人ばかりの、庄屋にしてはごく内輪な披露だった。

それは郁代が小地主の娘だったというばかりでなく、双方再婚でそれぞれ子持ちだという遠慮があったからで、この略式を誰も咎める者はなかった。ただ人々も口にするように、この略式な中で唯一つ派手だったのは郁代の衣裳だった。白無垢すらもこの際は派手すぎたのに、花嫁につきものの綿帽子も冠らずに念入りに化粧した顔を出したまま彼女は恥じらう気配もなかった。色直しには堂々と二回、振袖を着た。これには、つなさえも呆れて言葉が出なかった。振袖は、処女の着るものなのである。

朋子は遠くから、まじろぎもせず母親の晴れ姿を見ていた。白無垢で正面に坐っている郁代を見てからは、誰が朋子の周囲で何を云っても彼女の耳には入っていなかった。いや、人形さんのようにだと朋子を褒めた言葉を彼女はまるで母親に対する讃辞のように聞いてしまっていた。濃化粧の郁代は、整った目鼻立ちを一層はっきりと整えていた。何より美しいのは涼しく黒い切長の眼であった。それはまるで此の世のものとも思えぬ漆黒の煌めきをみせて、ただ一点を凝視したまま動かなかった。敬助の前に客たちは進み出て、そろそろ献盃が始まっていたのに、郁代は少しも彼らに乱されていないように見えた。彼女の前で人々が立ったり坐ったりする度に、彼女の瞳はその映像で一層光りを華々しく屈折させるだけであった。その無表情な顔に、そのときだけ驕慢な表情が生まれて、人々の反感をそそる一方で、朋子の憧憬はいよいよ激しいものになって行った。この美しい人から私は本当に生まれたのだろうか。

数日前、今日の衣裳に香を焚きしめていた母の姿が、いつの間にか晴姿の郁代に重なって見えてきた。白い香煙は立ち昇り、

高島田の髪と形のよい眉と、そして紅い唇とが、くっきりと浮び出る。あの張りのある眼は、ときどき人々の群に嫌気をさして、閉じたり、もの憂げに半眼に開いたりするようになっていた。これが、祖母の云う親不孝者の姿なのだろうか、と朋子には不思議なものを見るように考えていた。母は祖母が寝物語にしてくれる仏教の説話の中に現れる観世音菩薩のように美しいのに、どうしてこれが祖母を苦しめるのだろうか、と、朋子は分らなかった。

仏式の婚礼の直後、親族固めの盃事があったが、朋子はそのとき敬助と親子の盃をしたのを思い出していた。初めて嗅いだ酒であり、初めて味わう酒であったが、朋子は大人が気をつかうほど泰然として飲んだ。注ぐ方が勿論注意していたので量は極めて少かったけれども、そのあと少し味が火照った。披露の席に戻ってから、その火照りがぐらぐらと頭にのぼってきて、朋子の思考を混乱させているのかもしれない。

香煙の中で、郁代は時々面倒臭げに遠くを見詰めることがあった。そのとき彼女の瞳は潤んで、何か物言いたげであった。朋子は、いつその視線が自分に注がれるかと、待ち望んでいた。その視線が自分の眼と出会ったら、自分には母の云いたい言葉が理解できるのだと信じていた。このとき朋子に雑念が浮んだとすれば、敬助の先妻の子供たち三人が、向い側の席から盛んに彼女を見ているとき、それを払うつもりでか反射的に家に残してきた人形を思い出したことである。人形は、静かにあの華麗な夜具の中で眠っている筈であった。

朋子は再び花嫁衣裳に包まれている母を見詰めていた。一人娘である彼女に、嫁入る母は何を云い残すだろうか、その言葉

は確實に娘によって理解されなければならないのだ。

第二章

待ち望んでいた母の視線が、朋子に注がれたのは一瞬だった。すいと郁代は微笑み、首を微かに背かせて座を立った。果然としている人々を残して彼女は最後の色直しに立ったのである。鳳凰の舞っている紅藤色の長い袂が、このとき朋子にはひどく長いものに見えた。母の姿が祝膳の前から消えても袂だけは残っているような気がした。朋子に微笑したのか、色直しをうながした人に微笑したのか、あるいは新しい着替えに郁代が喜んで微笑したのか、それは誰にも分らなかったし、朋子も確かに自分に向って母親が微笑したのかどうか定かな自信は持てなかったのであったが、それを不満というよりはもっと確かな手応えがあったような気がしていた。少くとも彼女は、このとき確実に郁代の性を読んでいた。母親が彼女にはこよなく遠く、しかしこよなく気懸りで、だからこれほど近い存在はないということを、朋子は小さな胸に深く刻みこんでいた。

庄屋の家は村の西端にあった。いかにも旧家らしく豪然とした構えて、四囲をずんぐり背の低い厚ぼったい土塀でかこつてある。村の中程にある朋子の家から一本道を西へまっ直ぐ行くと、それがふいと道を遮る。瓦屋根のついた築地の高さは、小学校二年生になったばかりの朋子が背伸びしても足りなかった。両手を伸ばして、ようやく瓦に手が届くかどうかという高さだった。だが朋子は、そうやって土塀の高さを試してみようとは思わなかった。彼女の両手は今、藁細工で忙がしい。

大麦の新藁を先八寸ばかり千切って三本を組合わせ、順に一本ずつ向こうへ倒してはねじり、ねじっては倒して編んでいくと、可愛い籠が形づいてくる。底の尖った五角形の籠だ。ついこの間刈りとられた麦藁には早くも飴色の艶が出ていた。梅雨期にはまだ入らないのに卵の花くたしと呼ばれる長雨が続いたあと、急に雲がきれて、夏のような陽ざしが朋子の手許に流れていた。小籠が操られながら黄金のようにきらきら輝く。朋子は手先に気をとられながら、築地に添ってのろろと歩いていた。庄屋の家の黒い門は、いつものように厚く閉っていた。この門が開いていたのを朋子は二度しか見たことがない。それは今年の正月三日と、それからそのずっと前に朋子の母親がこの